

国家観歴史観の再築

菅考之著 「知恵なくば、国起たず！ 誇りなくば、国護れず！」（高木書房・一六二〇円）はオーソドックスな国家観歴史観を記述した本である。しかし我々には常識でも、これを非常識、異端の思想と敵視する勢力がある。その勢力は「民意」を盾にしているので強大で屈服させるのは難しい。

国を護り家族を守るのは誰だ

著書の二三八ページにこうある。「国会周辺では何度も大規模な抗議集会やデモが行われ、最近で一般市民に加えて有名芸能人や日弁連の幹部弁護士、さらには著名な憲法学者までが参加して『安閑連連法案は憲法違反！』『九条と叫ぶ老人たちに、ぜひこの本を読んでもらいたい。もつとも『読んでください』と本を渡しても百人のうち九十九人は一ページ眺めて投げ捨てるだろうが』」

それは、多くの日本人が「今の方がラクでいい。このままがいい」と考えるようになってしまったからだと思えます。「自分たちが戦うより、アメリカに護ってもらおう方がラク」「自分は自分の幸せだけを考えていた方がラク」「お金を手に入れることだけに集中した方がラク」という「ラク」に慣れてしまったから一度「ラク」の味を覚えるとそこから厳しい状況に歩み出すのは困難です。

戦後・捉振・齒舞・色丹の四島で実効支配を強めている。多くの日本人は自分の生活とは無関係だから、これらのことにも関心を持たない。日米が安保条約を結んだ六十年前とは、国防・安全保障に関わる環境は大きく変わっている。この変化を日本人はどう思うのか。

「私は産経新聞の読者である。染谷は産経新聞の読者である。おられるとおりに読むうちに、私の思想はみるみる保守に変わった。菅氏の本の内容は、私が産経新聞で読んだものである。」

「放射能は怖い」が叫ばれ続けるうちにこれが真実になり「原発再稼働反対」に賛成する人の%が上がる。恐くないことの科学的説明や原発なしの経済的損失を示しても、そうしたことを言う者をまともな人間ではないかのように憎まじげに睨みつける。

「安全保障関連法の制定により平和的生存権や人格権を侵害されたい」という訴えが、私に届いた。自分たちが選んだ代議士が国会で決めた「集団的自衛権を容認する安保法」が、戦争とテロを引き起こす不安がある、その不安で夜も眠れないから一人十万円損害を賠償しろという訴訟である。

「私は学生のはんぶんボリだ。私には左寄り人間だ。私が変わったのは、ボス染谷と和巴と仕事をすることになったからである。」

「この本を読み、『なぜ日本は立ち直れないのか。変われないのか』を改めて考えました。」

私は老齢で人間の出酒しだから武藤のようにこの本に感銘は受けない。感銘を受けたのは一冊の本が武藤をここまで変化成長させたことである。この本を薦めてくれた近藤藤氏に感謝する。

経宮管理講座 333 染谷和巳

ちんたら坊やが国士に変貌す

「私はアイウィルに入社し、まだ十一月目の新人です。今までは日本という国を知らなくても生活できる、歴史なんか知らなくてもいいだろうと思っていました。確かに日本という国、歴史を知らなくても生活はできます。私の周りにはそういう考えの持ち主の者がかりでした。私もそういう考えの中にいたので自然と周りと同じ考えになっていました。今ではアイウィルに入社し、この本に出会い、この本を読んで考えが一八〇度変わりました。周りで日本を馬鹿にするような発言、先達が作ってくれた歴史を踏みにた近藤藤氏に感謝する。」